

【運営方針4】開かれた農大づくり

【評価基準】 A:大きく上回る B:上回る C:概ね達成 D:やや下回る E:下回る

【基本方向】地域との連携や貢献活動等による情報発信		取組状況	評価	成果と課題・次年度に向けた改善策
<p>①地域と連携した課題解決に向けた学生によるプロジェクト活動の実施</p> <p>1 プロジェクト実施数:7課題</p> <p>2 地域と連携した取組み数:3課題</p>	<p>①地域連携・貢献プロジェクトの実施(継続)</p> <p>全学科の学生が主体となって「地域連携・貢献プロジェクト」に取組み、専攻分野における課題を調査し、地域の状況を把握しながら協働先、連携先を定め、課題への対応策の提案や地域活動の支援を行う。</p> <p>②地域と連携した取組み(継続)</p> <p>「新庄・もがみフラワーフェスティバル」や肘折温泉女将会と連携した山菜の食まつりへの参画等、農や食に関する品評会への出品や運営スタッフとしての学生参加を通し、当校の学習成果を紹介する。</p>	<p>本校の全学科において、各々の学習内容を生かし、プロジェクト活動に取り組んだ。主な取組みは下記のとおり。</p> <p>(果樹経営学科)最上さくらんぼブランド確立プロジェクト推進会議と連携し、結実確保に向けた現地実証、栽培研修会での園地提供、さくらんぼ品評会での参考出展、卒論の成果紹介等により、産地振興に向けた取組みを行った。</p> <p>(野菜経営学科)最上伝統野菜の生産者・組織や関係機関と協力し、「畑なす(新庄市)」の接木苗生産支援、「角川かぶ(戸沢村)」の優良系統選抜と採種を行った。(畜産経営学科)北村山地域の生産者と連携して、肉用子牛の発育向上を図るため、発酵緑茶粕と発酵代用乳の調製と給与試験を実施し、効果を検討している。</p> <p>稲作経営学科では、真室川町で開催された「第19回 米・食味分析鑑定コンクール国際大会」に「つや姫」を出品した。</p> <p>花き経営学科では「新庄・もがみフラワーフェスティバル」の運営にスタッフとして参加した。また、農大産の花きや野菜を使った「花生けショー」への出場やフラワーアレンジメント出品を行ない、目ごころの学習成果を紹介した。また、「かむてん公園(新庄駅東口)」の飾花活動を行なっている。</p> <p>農産加工経営学科では、産直施設「産直まゆの郷(新庄市)」と連携し、桑の加工品開発に取り組んだ。さらに、大蔵村肘折温泉で開催される「山菜の食まつり」に学生が考案したレシピを持って5チームが参加した。また、鮭川村の「きのこ王国まつり・きのこ料理対決」に参加した。</p>	<p>1・・・C プロジェクト実施数:7課題</p> <p>2・・・B 地域と連携した取組み数:5課題</p>	<p>(果樹経営学科)さくらんぼの現地実証園(鮭川村)で人工受粉を実施したところ、結実確保が図られた。また、卒業論文の総まとめとして、農業技術普及課と連携し、栽培講習会で卒業論文の成果を情報提供した。さらに、最上さくらんぼ品評会に参考出品し、品質等に高い評価を得た。次年度も関係機関と連携し、学生による結実確保対策を実施する。</p> <p>(野菜経営学科)「畑なす」では、土壌病害対策と収量向上のため、接木苗生産生産指導と苗提供を行い、産地を支援した。活動2年目となる「角川かぶ」では、産地の生産者と協議しながら固体選抜を進め、優良系統の選抜と採種に取り組む。</p> <p>(畜産経営学科)発酵緑茶粕と発酵代用乳の給与試験を継続し、子牛の免疫力を向上させる飼育方法を検討する。</p> <p>稲作経営学科の学生が出品した「つや姫」は、審査の結果、「食味値86点」の評価を得た。次年度も各地で開催される「米・食味鑑定コンクール」に出品し、評価を得ながら、学生の学習意欲の喚起につなげていく。</p> <p>花き経営学科では「新庄・もがみフラワーフェスティバル」への参加により、花き生産者や市場・流通関係者、種苗会社と交流し、情報を得ながら将来の花き産業の担い手を目指す。また、農大産の花壇苗を「かむてん公園(新庄駅東口)」に植え付け、管理を行い、新庄の玄関口の飾花活動を行なっている。</p> <p>「産直まゆの郷」の桑加工品開発では、桑の「実のシロップ搾け」と「葉のパウダー」の製造方法を確立した。これらを用い、新庄市特産のラズベリーを使った「ラズベリーケーキ」「ラズベリー・桑の実クッキー」「くわっくわロールケーキ」を開発し、レシピ集にまとめており、産直まゆの郷に提供する予定である。また、肘折温泉の「山菜の食まつり」では、学生が考案した「山菜のカクテル」が入賞し、宿泊客に提供された。さらに、卒業論文で「山菜ふりかけ」に取り組んだ学生が、「肘折温泉・朝市」でアンケート調査を行なった。「山菜の食まつり」には、次年度も参加する計画である。</p>
<p>②学生のボランティア活動への支援</p> <p>取組み数:5取組</p>	<p>① 学生主体の地域貢献活動支援(継続)</p> <p>学生が社会経験を積むことにより、今後の学習や進路選択に生かせるよう、学生のボランティア活動を支援する。(品評会への出品・出展、さくらんぼサポーター活動、交通安全の街頭啓蒙活動、新庄市中心商店街イベント等へ運営スタッフとして参加等)</p>	<p>さくらんぼの収穫労働力の支援として、学生ボランティアサークルが中心となつて「さくらんぼサポーター」を結成し、6月28日に東根市の園地で収穫・調整作業に取り組んだ。</p> <p>「山形県農林水産祭・林業まつり」においては、林業経営学科の学生が青年林業士とともにグラフィック作成の指導を行った。</p> <p>関係機関や団体が開催する交通安全啓発(4月、9月)、新庄市中心商店街美化活動(6月)、新庄そばガールズ(8～11月)、献血啓発(12月)、高齢者世帯除雪支援(2月)、新庄雪まつり(2月)等について、学生会と学校が協力しながらボランティア活動を行った。さらに本校学生3名が、来年度本格デビューする水稲新品種「雪若丸」のPR活動に参加した。</p>	<p>B 取組み数:8取組</p>	<p>「さくらんぼサポーター」として、学生10名(H28より1名増)が、3園地で収穫や出荷作業のボランティア活動し、いずれの園地でも好評を得た。参加学生からは、さくらんぼ主産地の栽培管理や労力不足等の実態に触れることができたとの感想があった。次年度以降も、労働力確保が求められることから、活動継続の予定である。</p> <p>専攻分野に関するボランティア活動は専門性が高く、学生がスタッフとして一般参加者に指導(補助)者として活動することで、学生は担い手としての認識を新たにし、コミュニケーション能力の向上にもつながっている。水稲新品種「雪若丸」のPR活動では、県内や都内での販売プロモーションや試食会等に参加し、貴重な体験となった。次年度も職員同行のうえで関係機関・団体と連携しながら、積極的に参加している。</p> <p>関係機関・団体から依頼のあるボランティア活動も、地域活性化等を目的に年々増加している。農大生が参加する啓発活動として評価を得ており、報道機関に取り上げられる機会も多い。このため、今後も学生会と日程調整等を行いながら取り組んでいく。</p>
<p>③高大連携の交流活動の取組み</p> <p>連携活動数:5取組</p>	<p>① 高大連携活動の実施(継続)</p> <p>県内の全農業関係高校、山形大学農学部との「高大連携事業」として「農林業・食料・環境を考える山形県民シンポジウム」及び高校の農業クラブ活動に対して、プロジェクト発表会や意見発表会での助言等を実施することにより情報共有と連携強化を図る。</p> <p>② 山形県立産業技術短期大学校との交流活動の実施(継続)</p> <p>農大生と同年代の学生が学ぶ山形県立産業技術短期大学校との交流活動を実施する。</p> <p>③ 他県農大との交流活動の実施(拡充)</p> <p>岩手農大との野菜経営学科の卒論の交流学習の充実と宮城農大との農大祭の相互交流に加え、福島農大との交流を実施する(新規)。</p>	<p>山形大学農学部と県内6つの農業高校と協力して「第8回農林業・食料・環境を考える山形県民シンポジウム」を開催した。高校生、農大生、山形大学大学院生による意見発表・プロジェクト発表「山形の農林業を支える私たちの挑戦」、基調講演「農(食)の未来のために～新技術・ブランド・物語～」及びパネルディスカッション「コロコロ・オドル 農林業」を実施した。</p> <p>高校農業クラブ連盟の強化練習会が、当校を会場に開催された。</p> <p>高大連携実技講習会(果樹の冬期管理講習会)を開催した。</p> <p>今年度の本校創立記念特別講義では、山形大学農学部の林田学部長を講師にお願ひし、「農と林の新たな連携による地域振興に向けて」という演題で講演していた。</p> <p>昨年度から交流を行なっており、産業技術短大の職員が当校の卒論発表会に参加した。</p> <p>本校と宮城農大の学生会の代表者がお互いの農大祭を訪問し、特産の農産物や農産加工品を販売したり、イベントに出場してPR活動を行なった。</p> <p>本校1学年が福島農大を訪問し、学習内容や施設を見学し、交流を深めた。</p> <p>宮城農大の公開特別講義に職員が参加し、交流した。</p>	<p>B 連携活動数:6取組</p>	<p>シンポジウムの意見発表とプロジェクト発表では、本校学生が、将来の抱負や卒論プロジェクトの成果を発表した。基調講演では、山形大学のスマート農業の研究等、最新の技術開発に触れることができた。さらに、パネルディスカッションでは、各パネラーが実践する特徴ある農業経営や農業にかけの思いをお聞きし、学生の学習意欲の向上につながった。次年度は、本校が事務局となり、山形大学農学部と農業高校の協力を得ながら開催する。</p> <p>高校農業クラブ連盟の東北大会及び全国大会での入賞を目指し、プロジェクト発表、意見発表の各出場者に対して助言指導を行った。</p> <p>高大連携実技講習会には、当校の職員・学生をはじめ、農業関係高校の職員も参加し、篤農家技術を学ぶことができた。次年度の活動内容については、連携強化推進会議で協議しながら実施する。</p> <p>今年度の創立記念特別講義では、林田学部長から、農林業の多面的価値や生態系サービス、農業と林業との連携による新たなランドデザインの必要性について御教示いただき、学生は農業と林業のつながりについて理解を深めた。来年度の特別講義も各分野の第一人者による講演会を開催する予定である。</p> <p>12月に開催した本校の卒業論文発表会では、参加した産業技術短大の職員から光環境や作業の軽労化等に関する専門的なアドバイスをいただいた。3月の産業技術短期大学校の卒業論文発表会には、本校職員が参加する予定である。</p> <p>本校の農大祭では、宮城農大から「仙台白菜」や農産加工品の販売があった。11月11日の宮城農大祭では、本校から精米「つや姫」「西洋なし(ラ・フランス、バード)」や野菜、農産加工品等を販売し、好評だった。次年度も、相互交流を行なう計画である。</p> <p>福島農大では、卒業論文の取組み状況や最新の施設・農業機械を視察し、今後の学習意欲の喚起につながった。</p> <p>他県農大の特別講義や研修会に参加し、相互交流を図る。</p>

自己評価	評価
<ul style="list-style-type: none"> 地域連携プロジェクトでは、各プロジェクトとも協働先から一定の評価をいただいている。次年度に向けて、成果や実績を検討し、必要に応じてプロジェクト課題の見直しを行つとともに、卒論テーマに反映されるような活動になるよう、さらに充実を図る。 学生ボランティア活動は、学生がコミュニケーション能力を高め、社会経験を積む場となっている。関係機関からの依頼が多く、取組件数が増加しているため、学生会等と相談しながら取り組んでいく。 高大連携シンポジウム等の交流活動は、農林大の学生が就職、進学に向けて取り組む学習の様子をPRできる機会であり、連携先と取組内容を協議しながら継続する。 	<p>B</p>

学校関係者評価(意見・要望等)→現在の取組状況・次年度の改善策	評価
<ul style="list-style-type: none"> 農産物や農産加工品を販売する際には商品パッケージが大切なので、デザイン等を学んでいる大学等と連携してはどうか。一商品の包装・デザインについては専門の講師から講義と演習を通して学んでおり、この学習の成果を生かしてラベルを制作し、農産加工品等に張って農大市場や校外の販売実習で評価してもらい、デザインの改善を図っている。 他県の農大や大学等と交流してはどうか。→宮城農大とは農大祭での相互交流、福島農大には視察研修で訪問するなど、交流している。また、県内の異業種の大学校である山形県立産業短期大学校とも、お互いの卒業論文発表会へ参加して、異分野の観点から様々なアドバイス等をいただいている。さらに、県内13の大学、短大、専修学校等で組織している「大学コンソーシアムやまがた」にも加盟しており、協力して事業等を行なっている。 	<p>B</p>